る。早年にも呉虞は仏教への関心が高かったが、これは自らの学問の欠けた部分を仏学をもって補う事が出来ると考えたためである。この時の学問としての仏教が、晩年の信仰としての仏教へとつながっていったと言えるが、晩年の仏教への傾倒とは、孫少荊などの友人の死や不安定な社会情勢において、安らぎをもとめようとした呉虞の思いのあらわれである。これは、その教義だけをとり、敢えて信仰する事はなかったキリスト教とは対照的である。

二つ目は彼の娘の結婚式に際し書かれた「周畦呉植訂婚講演」のなかで、あらためて儒教の婦女への蔑視、一夫多妻の点を批判し、日本の良妻賢母の夫婦関係に理想の家庭像を見出した。呉曾蘭・劉道秀という良妻とともに学問を成し、後妻の常道玄との紆余曲折を経た呉虞の晩年の文章である。

結　論

以上、本稿では呉虞という人物が思想史において果たした役割と、その半生からどのように彼自身の思想が形成されていったのかをみた。呉虞はその生涯の中で、ほぼ一貫した反儒教の説を唱え、封建的な家族制度に反対し、新しい家族観を模索した。それらは時間を経ながら試行錯誤を繰り返していったが、呉虞の多面的な思想が、その形成過程において実生活の経験の中から学問に昇華されたものであった点を見逃してはならない。

良渚文化後期の状況から考察する集落間の関係

濵　慎一

目　次

はじめに
第一章　良渚文化の分期と分区からみた遺物の特徴
　第一節　良渚文化の年代と分期
　第二節　良渚文化の範囲と分区
　第三節　分期と分区からみた遺物の特徴
第二章　周辺地域に見られる良渚文化の因素
　第一節　良渚文化の特徴を顕著に表す遺物
　第二節　周辺地域に見られる良渚文化の遺物
第三章　良渚文化の集落間の関係
　第一節　周辺地域出土の良渚文化の遺物とその関係
　第二節　良渚文化の集落についての再考察
おわりに

はじめに

新石器時代後期の研究では、社会構造を象徴するような特殊な遺構・遺物の検出などによって、文明や国家の起源が議論されることも多い。良渚文化においても、城壁はみられないが、約三〇万㎡の人工の墳丘（浙江省莫角山遺跡）や、大量の極めて精巧な玉器が存

在する。この様な巨大建造物や玉礼器から、すでに顕著な階層差が生じていたことは確かであり、その階層差は各集落間にも及んでいたと考えられている。これまでの研究から、良渚文化において遺跡群は四～七カ所確認できる。遺跡群内の関係は、最高中心集落→中心集落→一般集落のような階層の図式に当てはまることがおおよそ定説となっているが、各遺跡群、中心集落間の関係は明確ではない。

本稿は、周囲に拡散した良渚文化の因素を分析して、周辺文化に与えた影響を再確認する。その後、良渚文化のいつ、どの地域の集落群がそれら周辺文化に作用したのかを検証する。周辺地域にまで影響を及ぼす事ができる遺跡群は、おそらく良渚文化内部でも大きな影響力を持っていたと推測できる。そこで良渚文化の遺跡群中、特に優位な遺跡群はあるのか、あるとするならば、他の遺跡群との関係、特に中心集落間の関係はどの様なものだったのかを考察していきたい。また良渚文化全時期に亘っての資料を使用し、良渚文化後期の状況に至るまでの過程をより明確に検証しようと思う。

本論

まず、第一章第一、二節では、未だ定説の無い良渚文化の時代区分と範囲・分区を再検証し、時代区分を一～三期に、地域分区を「良渚地区」・「嘉興地区」・「太湖以東地区」・「太湖以北地区」の四区に分けた。その結果をふまえて第三節で、良渚文化の時期ごと、地域ごとの遺物の特徴を示した。一・二期には各地において地域独自の特色は大きいが、三期以後は共通性が強くなる。また三期には「太湖以北地区」を中心に多節の玉琮が多く出土していることを指摘した。

第二章第一節では、良渚文化の特色を表す遺物を確認した。良渚文化では他の新石器時代文化と比較すると、玉器の製作が盛んであり、器体に独自の神の文様などが施されることも多い。特に玉琮には必ず器面に神面が彫刻され、器形や出土状態から、宗教礼器であったと考えられている。また、玉琮が良渚文化を起源としている事も先行研究から既に明らかであり、良渚文化の特徴を顕著に表す器物と言える。玉琮以外では、玉璧・玉鉞・石犁などにも良渚文化の特徴を確認できた。第二節では玉琮などの玉器を中心に、他の新石器時代文化に見られる良渚文化の遺物を検証していった。そして、北は山東省、西は甘粛省、南は広東省まで、非常に広い範囲で良渚文化の要素を見い出すことができた。そして、各地から出土した玉琮の器形・文様を分析すると、良渚文化からの直接搬入品と思われる玉琮とそうでない玉琮に分けることができた。大汶口文化・山背文化・石峡文化の範囲からは良渚文化の玉琮或いは直接影響を受けたと思われる玉琮が出土している。その他の地域では、玉琮に文様が施されないもの、また玉琮に施された神面文が良渚文化のものより著しく簡略化されていたり、変化していたりするものが出土している。そのため良渚文化とは直接的な交流がなかったと考えられる。

第三章第一節では、良渚文化のどの区から、またはどの遺跡群が、いつの時期に、他の文化に影響を与えたのかを解明しようとした。

そこで、直接的に良渚文化の影響をうけたと思われる文化の遺物を分析し以下の結論に達した。(一) 大汶口文化中期に属する江蘇省新沂花庁遺跡からは、良渚文化からの搬入品と思われる玉器や土器などが多く見られる。貫耳壺、双鼻壺、豆などの土器の器形から、「太湖以東地区」の福泉山遺跡がこの遺跡に対して強い影響を与えたことが解った。また、江蘇省海安青墩遺跡、江蘇省埠寧陸庄遺跡からは、「太湖以北地区」の寺墩遺跡と相似した遺物が出土している。これらの事から、大汶口文化には良渚文化の二期前半から三期の初頭に「太湖以東地区」からの影響が見られ、三期以降は「太湖以北地区」と深い関係があったと思われる。(二) 広東省の石峡文化からは玉琮が一一点ほど出土していることが確認できたが、これらの玉琮には多節の玉琮が含まれていること、また文様の分析から、三期中頃に「太湖以北地区」からの影響があったと思われる。また、切断された玉琮の模倣が見られることから、「太湖以東地区」の福泉山遺跡、「良渚地区」の余杭横山遺跡との関係も考えられる。(三) 西方の薛家崗文化は新石器時代中期から「太湖以東地区」の福泉山遺跡を中心に絶えず交流があった形跡がある。福泉山遺跡から薛家崗文化の石刀が出土していることも、お互いに影響があったことを裏付けている。

第三章第二節では、これまで分析してきた良渚文化と他の新石器時代文化の関係をもとに、良渚文化の集落間の関係や、社会構造について考察した。

「良渚地区」遺跡群からは、良渚文化中期前半(二期前葉)を中心に、超大型の墳丘や、大量の玉器を有する墓など、良渚文化内での財産の集中、顕著な階層差が生じた事がわかった。しかし、三期以降に属する大型墓や遺跡はほとんど発見されていない。

「嘉興地区」遺跡群からは、良渚文化の全時期を通しての遺跡が発見されている。しかし、良渚地区や、太湖以北地区に見られるような大墓の存在は未だ確認されていない。遺跡群間にも階層の差違が顕著であったことを表している。

「太湖以東地区」では二期中葉頃から顕著な遺跡群が見られる。この地区では、良渚遺跡群で生じた上下の差の大きい階層差を維持したまま、更に広い範囲(良渚文化の外)からの財産の集中が見て取れる。また、良渚文化の以外の文化への玉器の移動が始まるのは、二期中葉、福泉山遺跡を中心としてではないかと思われる。

「太湖以北地区」では三期中葉から寺墩遺跡を中心とした遺跡群が見られる。寺墩遺跡からは、五節を越える大型の多節玉琮が四十六点出土している。多節玉琮は他の地区からは数点の出土が確認されるのみであり、この地区に圧倒的に集中していると言える。この事から財産の集中の後の、再分配があった可能性が見て取れる。もしも多節玉琮を始めとした玉器などが再分配されていたとするならば、良渚文化の分布範囲の全体を覆うような広範囲に、一つの遺跡群の力が及んでいたことになる。多節玉琮の広範囲での分布の理由を、良渚文化内の交流が盛んになっただけと捉えることは可能では

ある。しかし、良渚文化全体を覆うような力をもった集落、遺跡群の存在を念頭に置くと、良渚文化内部での交流が盛んになった理由もより明確に理解できる。多節玉琮はまさしくその証拠であると結論づけたい。

また、これまで出土した墓葬、遺物からみると、良渚文化の最大の中心地は、時期によって良渚地区から太湖以東地区、太湖以北地区と移動しており、中心集落間での力のバランスは変化していたと考えられる。なぜ、時期と共に、良渚文化の大墓が存在する遺跡群が移りかわっていくのか、という問いの答えにもなるのであろう。

おわりに

良渚文化はおよそ千年の間、太湖周辺を中心として、同時代の周辺文化に大きな影響を与えていたことは、これまでにも多く論じられてきていた。しかし、良渚文化内部での千年間での移り変わりは、土器や玉器の編年が研究の中心であって、良渚文化の社会構成や集落間の関係には及んでいなかった感があった。本稿では、良渚文化の社会構成の一端である遺跡群と遺跡群の関係には力の差違があり、時期によって最も影響力を持った遺跡群も移り変わっていったことを指摘した。また、寺墩遺跡の玉器の集中に見られるように、千年の間に良渚文化の階層上位者は権力を次第に強めていったことが具体的に示せたのではないかと思う。これは初期国家が生じていく過程の一局面ではないかと考えられる。

清末留日学生研究

矢野陽司

目次

はじめに
第一章　初期留日学生と諸学校
第二章　留日学生と唐才常自立軍起義
　第一節　唐才常自立軍起義に参加した留日学生たち
　第二節　日華学堂の学生と唐才常自立軍起義
第三章　留日学生団体の誕生
おわりに

はじめに

清末留日学生の歴史は、一八九六年に十三名の学生が日本へ派遣されたことに始まる。清朝が留学生を外国に派遣するのは実は日本が最初ではない。日本への留学を遡ること二十年以上前、一八七二年に曽国藩の手によってすでに欧米への留学生派遣は始まっていた。しかしながら、これらの留学生派遣は容閎のような一部の例外を除いて、ほとんど確固たる成果もなく、事実上失敗に終わっていた。

日清戦争において日本が勝利した後、清朝の関心は一気に日本へ